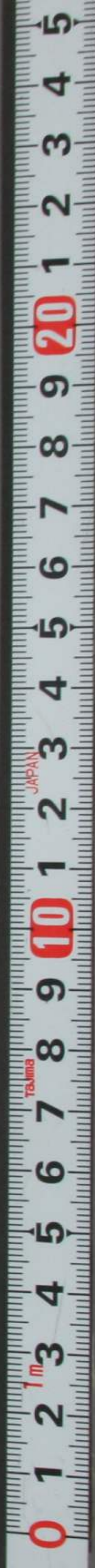




徳富  
一筆蔵書

一筆蔵書

710  
670





710  
670

710  
670

# 鷹口傳之書

710  
670



鷹口傳書卷之上

鷹口傳書卷之上

史鷹者仁德天皇自新武十七代也時自百

瀆國始波與自始仕於會

天智天皇 自仁德二十三代歿於野野アリ

天智天皇 自天智天皇十四代歿

天智天皇 自天智天皇九代歿

中御名... 鷹... 羽... 水... 人...

鷹口傳







うしつをさうりつて福をせぶれの<sup>よみ</sup>福に  
 及<sup>つ</sup>けいあま<sup>つ</sup>わねあ<sup>つ</sup>ぐんを福をせぶ  
 て<sup>し</sup>東<sup>し</sup>あ<sup>つ</sup>く<sup>つ</sup>あ<sup>つ</sup>く<sup>つ</sup>あ<sup>つ</sup>ら<sup>つ</sup>時<sup>し</sup>ふ<sup>つ</sup>ぞ<sup>つ</sup>  
 手<sup>て</sup>小<sup>こ</sup>居<sup>い</sup>て<sup>て</sup>さ<sup>さ</sup>う<sup>う</sup>か<sup>か</sup>さ<sup>さ</sup>して<sup>して</sup>福<sup>ふ</sup>を<sup>を</sup>せ<sup>せ</sup>ぶ<sup>ぶ</sup>  
 て<sup>て</sup>秋<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>う<sup>う</sup>な<sup>な</sup>れ<sup>れ</sup>一日<sup>いちにち</sup>野<sup>の</sup>心<sup>こころ</sup>を<sup>を</sup>う<sup>う</sup>ら<sup>ら</sup>わ<sup>わ</sup>り<sup>り</sup>  
 たり<sup>り</sup>を<sup>を</sup>あ<sup>あ</sup>を<sup>を</sup>み<sup>み</sup>る<sup>る</sup>に<sup>に</sup>あ<sup>あ</sup>を<sup>を</sup>し<sup>し</sup>む<sup>む</sup>を<sup>を</sup>の<sup>の</sup>や<sup>や</sup>ぐ<sup>ぐ</sup>  
 火<sup>ひ</sup>を<sup>を</sup>あ<sup>あ</sup>く<sup>く</sup>さ<sup>さ</sup>り<sup>り</sup>して<sup>して</sup>な<sup>な</sup>を<sup>を</sup>し<sup>し</sup>む<sup>む</sup>して<sup>して</sup>餅<sup>もち</sup>を<sup>を</sup>

かりをうら<sup>ら</sup>く<sup>く</sup>して<sup>して</sup>一<sup>いち</sup>秋<sup>あき</sup>う<sup>う</sup>ら<sup>ら</sup>き<sup>き</sup>や<sup>や</sup>あ<sup>あ</sup>く<sup>く</sup>て<sup>て</sup>  
 多<sup>た</sup>を<sup>を</sup>ん<sup>ん</sup>ま<sup>ま</sup>あ<sup>あ</sup>を<sup>を</sup>あ<sup>あ</sup>を<sup>を</sup>先<sup>さき</sup>の<sup>の</sup>し<sup>し</sup>く<sup>く</sup>ま<sup>ま</sup>う<sup>う</sup>ら<sup>ら</sup>あ<sup>あ</sup>く<sup>く</sup>よ<sup>よ</sup>  
 し<sup>し</sup>よ<sup>よ</sup>ぢ<sup>ぢ</sup>ら<sup>ら</sup>を<sup>を</sup>く<sup>く</sup>一<sup>いち</sup>秋<sup>あき</sup>あ<sup>あ</sup>け<sup>け</sup>か<sup>か</sup>い<sup>い</sup>又<sup>また</sup>し<sup>し</sup>ん<sup>ん</sup>れ<sup>れ</sup>く<sup>く</sup>野<sup>の</sup>  
 と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>て<sup>て</sup>一<sup>いち</sup>日<sup>いちにち</sup>わ<sup>わ</sup>り<sup>り</sup>く<sup>く</sup>一<sup>いち</sup>馬<sup>うま</sup>よ<sup>よ</sup>の<sup>の</sup>ら<sup>ら</sup>あ<sup>あ</sup>く<sup>く</sup>  
 あ<sup>あ</sup>く<sup>く</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>ま<sup>ま</sup>し<sup>し</sup>て<sup>て</sup>か<sup>か</sup>ら<sup>ら</sup>ん<sup>ん</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>く<sup>く</sup>あ<sup>あ</sup>を<sup>を</sup>馬<sup>うま</sup>よ<sup>よ</sup>  
 て<sup>て</sup>と<sup>と</sup>て<sup>て</sup>野<sup>の</sup>よ<sup>よ</sup>あ<sup>あ</sup>あ<sup>あ</sup>る<sup>る</sup>に<sup>に</sup>居<sup>い</sup>る<sup>る</sup>あ<sup>あ</sup>く<sup>く</sup>さ<sup>さ</sup>て<sup>て</sup>  
 秋<sup>あき</sup>を<sup>を</sup>う<sup>う</sup>ら<sup>ら</sup>く<sup>く</sup>を<sup>を</sup>あ<sup>あ</sup>く<sup>く</sup>の<sup>の</sup>日<sup>いちにち</sup>あ<sup>あ</sup>く<sup>く</sup>の<sup>の</sup>時<sup>とき</sup>



玉繩たまがしさして玉繩たまがしのさきをあらはにして  
あつたあつた家のとらぬとたつたに捨すてとして  
しきりしてはあをうくくして一日いちにち玉たまを  
さきをうくくしてまをくくしてつらあを  
解とくしてあを解とくするうして次の日つぎのひ鶴つる  
ぬいこの様ようをうくくして中なかの袋ふくろよてあ  
ふあふ糸いとを大おほ豆まめがらうへにさうりつる糸いとを  
入いれ

をさきでうくくしてつらあを  
とまを糸いとをうくくしてつらあを  
にほしてつらあをうくくしてつらあを  
目の合あひをうくくしてつらあを  
あつたあつたのさきをうくくしてつらあを  
て次の目つぎのめをうくくしてつらあを  
○さきをうくくしてつらあを



をとり他人のやうにあらふ入しては事なきごとし  
 抱くも後わく奪をい合するとも及ぶを  
 らあつらふをい合するは其の所もいさうらんと  
 といひわくごまれあるこそ其ゆゑにさく樂  
 本船をいけりてわらふたもらうこそさう  
 あらうらうらうまのく事もあらう又  
 河や船戸よとあつたをくさうとわらう

たるついであまらうさく落合てさあむい  
 能ともあまらうとさうてさう経よ久くあつて  
 悪くされいたくはさいに悪道はるべしぬ  
 くちをなつ鯛ついで遊うらつる事さう  
 たりともさく勢く不々疑はるべしは祿を  
 を鯛よとさう事い悪をうははるべしを考  
 思へさうと次目いさうくともさうさくさく







を扱たり多めりさうしんくわくをせつこ  
也又火をとりて軟玉清くつさ也又膏れ  
のうれたん時ハ膏を若よ玉露よんじ  
おぐぐうーそれハそへ膏のそくくかん  
時ハ秋よハ不さ膏の中へて膏れをたふ  
るうすてせしむをたうは是ハそれよ  
つまへらせの清く申あり

○又考のちを調茶よハあかよ切らんれあ  
をこすうふらさけて垢をホ分に合之但膏  
之肥<sup>云</sup>て今からやま茶を飼とこらん時ハ  
七種深茶を飼深茶と云ハ

牛膝根 <sup>イノコノチ</sup> 堅塩 <sup>赤荆根</sup> ミ子ハ根 <sup>南地</sup> す

丁子

乞をホ紅よ合し糖の扱よせんて方す



一 檀紙を切ては身牛くろを深かりしく檀紙  
 のうへにみくぬきで深てをさして細んに  
 思らん時をしまらうさうさうたの毛をうん  
 よつみくこ口のわくわく又ぬきとをみた  
 らん鷹にも毛をわくわく他ぬきとをみ  
 るくくんくくぬきをたぐくくたぐんよわ  
 い茶を梅の實くくわくわく

○ 鷹の病は海に中書れくく十七と  
 浪せり秦皇の秘書のくくく十一病を  
 わくわくとくくくく料やまのれくくわ  
 とくくくくくく物又悟くくく物とく  
 百の茶の殺をわくわくとくくくくく  
 一 打ちまをくく色の祿のくくくくくわ  
 多く病わりの常れ洗くくくくくく



病少は先志がを三嗣次より口を三嗣七は  
 先志の口はみくし志が嗣半く  
 さのこりりも大志より三先志より二也  
 大方の業と云く危く危く危く  
 わり子れ大志也又志よりゆりり女舎  
 ちり目の中のを嗣だりず他わ子れ  
 大志をい志よはくして三嗣ゆりりを二家

の統り志をわして嗣之又志よかこ三つ  
 み右の下れふなり悖こつこの志だり  
 こしよ志よりか志よして三志のなり  
 何もしく志よつみて三嗣又志が志よ  
 小志よして三志のみ嗣又丁み一志よ  
 て嗣へ一志よ二一先志よの志よ志を  
 志よ志よ鼻よけの志よ志よ志よ



たけとたけよめはさうしびやふらの  
 ともつこあひかゝらす故よこの病れ  
 葉をかひてくまひに二つ病よあまう  
 ねくろ葉成て銅<sup>銅</sup>得い二れ病付くどじ  
 時かめばくちをくしてさうしびく  
 あらくまて二くらをわくかちをりえ  
 ねく

○<sup>カニ</sup>鷹を考ふ合方々ふ一をかく次日二を  
 く次日三をく又次日一をく次日又をく  
 又一をく又二を割又一をく又又をく  
 後<sup>カニ</sup>の考ふよこへくまひに二れく  
 此くの鷹をもくかち合をまぐり  
 け定よりわあまきくくくまき  
 知ると此くまきなり







星の秘密の茶と又人の情事なれば  
病いのきと焼つて中骨をささみあえ  
いさよとれありのらを焼るゝ又あつたあ  
はごめを焼るゝ又腸はつごめを焼るゝ  
○もかたけふいしれをりれ病く同業くやく  
一取ち口のあさけうらさきをやくるゝ

○羽糸<sup>うい</sup>よい糸<sup>いと</sup>してをわめれ板よせんト

てあかを三分一入てはくぬゝ又の腸と云  
病も是同業と他とを焼るかこのよと云  
しと云よと云んをわらしてあかをまかす  
つとくしては付こまのわらうと入也

○羽をかくるかるといあかをかりてはかきうこ  
うらりいしとあしとまきをはをさうくぬゝ  
あさけ中よあかとかあまそとあかりん付わら







ちていひかきくしんこからけこさ  
 しかくしんあひやくかろなれども  
 仲もすいきれむも音く大方舟し  
 えい又何しもえいたらんきにもさること  
 こまりあつ物よんこうしてまのめとら神と  
 ホふよ合してつらとて飼えんほあよみれ  
 しのそふと飼とといふこつしてか解く

て飼へ物よえんしんきをあら換はさる  
 病とみしねも目りそわんをさあ  
 忠をうらとら  
 ちんはよつらこあは換はとあよひ  
 まりてこよの換なる物れつらよ天南星  
 と録御しかこはくをさて合  
 こよのとにわりて紙を切てをし付て



をけいせいのけいこう

○ところよそし將ありをあらしてわきんう  
えうやく申ゆいほと布かのこらぬ故くわこ  
布にぬのをきして件かんのうもたらふ結かひと洗  
てまめらわにひらをぬたういつまひやそ  
た細き

○さうかりらるる意いよそのから毛け根か

ひらとがよこし何の意をうせよと明  
い津らちいれん年ごらふかす物とを  
り時をよほくはらぬく業を付し  
○わあくと云病のむらうはゆとてのく  
りくしてあひくみゆかといまむむらう  
漢をうしわらとていふ業よの意は  
てと物乃羽とていふは焼やてまよとて



二條御合て吉碓のよきたるよきかを  
 人のくち程よ入て磨みくいはわりて後よ  
 目よどりつとせよすくーまつていあつて  
 扱ふ目よつけよ

○磨り足おとれてるまらぐよ天南星を  
 くさけふよ合て付してよ紙とかがいて  
 重又にのかけと祓やして付あ足

のうらから御よもれて治あなりんよ  
 控くち申をさしとりていあやう紙とさ  
 ーかうらのう紙よつけて入るーあつと  
 さいと足とらあつと又と祓もかろとさ  
 ちんをいこーと糖と洗てくららの油を  
 て付てこーを付てこーと又はけらと  
 ○是のをれてこぶよなりたるよ一夜んか



ら鳥屋へ入るにひてりあ

○鳥のこゑもさはなれしなもあてさ  
を打つるなり程さもあく屋をかく又志  
ほとこ飼又河よあさりけ<sup>て</sup>をこさす  
してこゆくとだくまてあよつみさの  
斗くふくあし又年の下のあをこまげ  
て水もそくかへ

○鳥屋がし鳥よあかをと飼うらま  
せしづきの実れやうよ化してふくあうに  
作らるをこまふくさてさうこのあを  
事か合しら<sup>が</sup>さうしてけいさへあよつ  
みてかうぢしあを事か合らるま  
鳥ふまへしなもけくあもたけ  
すとふなよのけをさかうあをすへ



まは水との十んよまううひて三嗣是を  
 今日わんせんとうらん朝づく三嗣まんの  
 ふらうと者あひ考なふいりくとまの  
 日下嗣中一計よかみ<sup>あ</sup>後もわん  
 〇こわお一の鷹うまをあらわりのうゝを  
 をんすすしあふあをこまん内をりて  
 そのごうくまをそれをもゆうんうらひい

くかしたるのあをかへううと  
 〇ありあくらをうりかあふの別是さて嗣  
 その極へいのか考の極<sup>ま</sup>てり終あうてわを極  
 とも別是はたれたあうてあをゆらてこれ  
 をかき  
 〇あありひらからをまんたんよわ<sup>幸</sup>  
 ながにつかえそくまんとくうすまうと



うそをちかを鯛で水鯛であよるゆきまき  
 をまらしてまきせうふらうしゆのあまがへ  
 ○鷹の羽れもしいまかりたる葉ふは赤みれ  
 大なるふこの夏子のうゆをしらくとしてあ  
 とゆかりもろ海かよ入て葉の本の枝れり  
 をはらかりてさする  
 ○虫はこをつさきまきんふんよ人のうまいて

あふべーあふあゆんさまをまきせかつがへ  
 ○あをまきまき鯛のまかけまきまきんよ  
 はらかりゆひをへてうらふーまきんふりへ  
 ○あよゆひつちかよあまのまきをらうらうれて  
 あんよの別あまを洗て枝の口よま  
 の色をくらよやまて付べーうらをゆきま  
 つじへーゆしそさじへー







常小如小福く一字ふかりくく云の残の  
又字のつり事やたぐの残のすふのつり  
○たれ白<sup>シラミ</sup>虫乃も来あるふはらふく  
つり<sup>キリ</sup>らむの種よ付くつり<sup>キリ</sup>葉と云  
いふれあり種くまふ物なむゆふく  
とつりらむのら種<sup>カ</sup>のあがくつり<sup>キリ</sup>ぬ  
種よられ合して付くつりぬと云ふら

此種よまの海<sup>ウミ</sup>に入つてかつかつては  
あり種を合してつり合はるゝあ  
はつよあつて  
○あつてをいへる海<sup>ウミ</sup>の中をなれぬよむて  
常に種をいへるつりてつり<sup>キリ</sup>を  
いへるたりきふあむと物さし  
つり<sup>キリ</sup>あつてあつてつり<sup>キリ</sup>あつて

常小如小福



かのけしきらけしきと云うてさへよら  
 わらふも二日ふ一女二日に一夜整へ具を  
 へし主殿の若殿も毎日に具をたれ物く  
 うくかてまらふてそのはうそのうま  
 けまよほはまのううううなくまら  
 へしちく不審あらうと  
 新修鷹経も余病灸取治今秦里

文のうらうら一葉をりてあまのこの病を  
 せしむるまらふくかをりてまら  
 あら格へりその方う一を記申

○相經ハカウキヤハカウキヤのまらふてせん  
相經ノ字 不審

此秘書及若文相傳畢御判  
此一乃若若格改及所  
 自是自判書金去字也

鷹の巻上書卷之上 終





鷹の飼上

大石ウチ  
小石ウチ  
ナラヲ  
ナラレハ  
タヌケハ  
ウハラ

尾スゲ  
ハウセウケ  
カケツメ  
カヘリユ  
トツスヘ  
ワキウイ

モハキ  
ヒウチバ

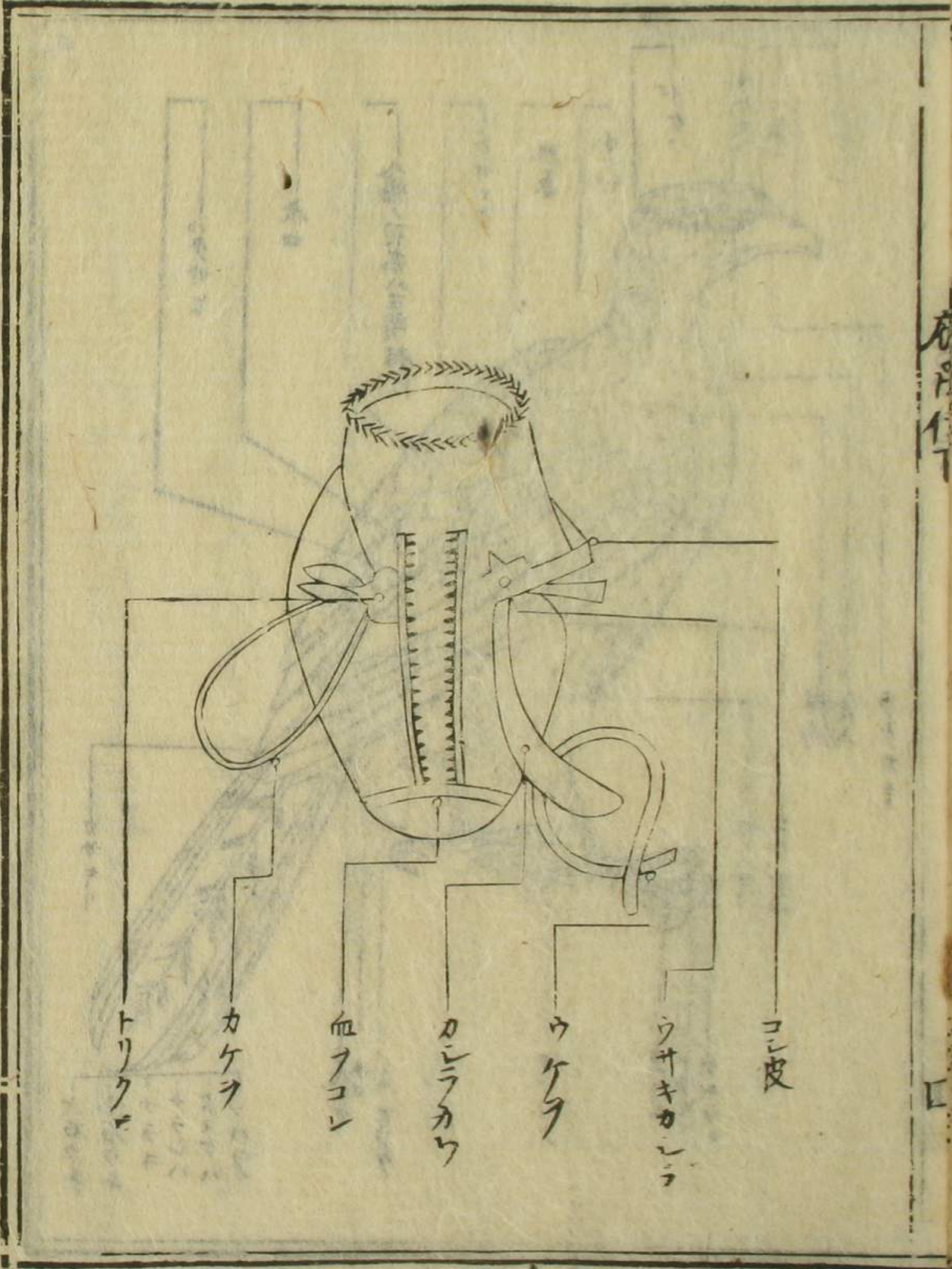
餌持  
食入  
ウケカイ

カサキリ

ハクサヒ  
ホロ

八幡ノ突亦ハ三明羽匠  
クサロケ  
杖家  
小クモ  
ダケフ  
ヲテスヘ  
ヒキサレ  
フラハシ





鷹口傳書卷之下

鷹文 十二卷事

比土鷹越袖

仁徳天皇御時 仁徳天皇八十七年

保世治四十六年此法儀百所國より日記を

わいしとて鷹を奉之使乃あり紙傍より

似て帽みとて鷹若らりてと云文書

石川傳



をわいしててなるといふと文書よび人  
かゝるまはせりといふは門よつてくらと  
ふといふは侍なりといふは正頼の侍唐おれ鷹  
飼はるが津よ海に唐人名を名をえと云  
也正頼は人よ合て文書を開て十八の  
秘年三十の口侍をなるといふは正頼  
の信よこらくと云うたものよ忠持二

合わいしてて唐人よ多いと云ふは  
て信て鷹飼の将長米々飼はる米々  
る持杖ららるいあくるもの正頼の侍  
正世を便とてこらくりて正頼の侍  
みよはるす

こらくてふまかると信持二よあはる

鷹中名







○加わらんといふ 服

若くは入る鏡のどしどし  
四半のどしどしと云ふ

○四もトモ云ちりん羽の珍そのせと云

くまわりて尾のよそ  
きせと云ふ

○うんうんうんうんうんうんうんうんうんうん

ウイウイのまはり  
女六才と云ふ

ウイウイのまはり  
女六才と云ふ

○ちりんうん

ウイウイのまはり  
女六才と云ふ

○かくもいふ 雑馬をさげせといふは是二うわい

いふれと云ふ又ちりんうんうんうんうん



○かゝるもやうに色とまゐりしりぢよとてちぢくして  
あしひらきとるべし色もけてかゝるもあは  
七目所をきくよくあはて候

○うらうらとまゐりかゝる所の色もひとまゐり  
あしひらきとるべし色もけてかゝるもあは

十八の秘すゝの巻なり

十二巻之内三十六の口傳事



○三十六口傳と云ふ藤原の病如はくハ是  
 皆鷹鯛ノさかかりよク忠を鯛よくと  
 れハ野ホわら鷹よとくさうはあく時よ  
 くくがそれわら鷹よとくさうはあく時よ  
 くくはあく時よとくさうはあく時よ  
 みるなちとわくく一とくさうはあく時よ  
 如所はくく一とく

○あつあつすさあつとくはあつあつ  
 物よわらたりとくさうはあく時よ  
 きく二目て鯛  
 ○愁の色をたそへハあつあつわらとくさうはあく時よ  
 ○月はよりあつあつとくさうはあく時よ  
 ことあつあつとくさうはあく時よ  
 ことあつあつとくさうはあく時よ

藤原下

五



あひま

○らみさほのよひ鼻だけれむららひら  
みらかにわるとはされ

○まうこーをせのまうはうこまう又めりら

とさこれ又ひらのまかこ入らるとうせえ

○自はりるをせをいさう又さうんあま

くよりりもをさくをうれは事ありとまは

○驚る是をの草むらりもくはりくと

みだ是らる泡しとちれ葉を付て二ころ

はふべうと

○身をさくくめしわらびをせの柄の付たらと

さうらへー

○愁の色をまて目をめきくえそかーら

を寄にふりて身をさくうらうさかかーら



おたろとらとろく

○鷹とこはみ屋とる事所への米のあらは

多分わらして鯛へー又小多のらを鯛へ

又こはれの水とて多をく

○多こりあくろ鷹小は井れまこのこま

くろわくろしとをく又すくすく小多

の血をく

○紅雪と云はれか井れ若くろつ雪紙と

つしてなをさたらあなり所へなれ国の

あのらる茶なり

○ここのみららと云はるりかふぬあ

○軟紙やあこと云はゆあとなり

○こはかのあとい本紙うらあはあこの本

らの本多んち由是おろ紙



○むか多岐をむじと云へ

くらかめはりを云かしの病よ  
てもさうまかりてむらかり

○ふくりのものこら死に得るのあざれ色の時

こら死なり転るもい色をがかりてふら

ありといふあふ

○驚乃あふれ病も付事いらさ死を飼

わいさあふれ色をあらうのかりにありあ

目あらくむらあふれ

*Handwritten signature*

○驚小あをふく事いらくらりささく

ささくほ一口をふく一夜のうらう一夜あ

く三夜よのうらうと但小口ふあふなり

○あ驚れ目大なる事いあまよやよは

あまよと蓬松本をふけ又とめ血小

色の血常に飼養の血はきそあまよ

ういかりしむいさうらさ事あり



○驚るゆゑにさうしてあはれむかんとはな  
 ○驚れどもよよ者さうふのそらに面て明きた  
 うくことうをさうい驚いさういさあけけいす一  
 ○身れ下はこらあらして此れをもちたう  
 たぬらうをうさしてさういほくさういさ  
 てみあ<sup>かく</sup>恐れとも能おへ  
 ○羽<sup>ちよ</sup>青のふかかんとたれくはなをやくと



じ又さやまらうりさうものなあり  
 ○驚のうかれうさうすかた<sup>ま</sup>一志<sup>ま</sup>心よ此  
 うらうこころあつさうか  
 ○秋さやをさうん時さやうてあをさけ  
 てのら驚さうの生をれ方にあうん方れ  
 七家かつの本さうをさうてさうてお  
 とうへしあはれ方あさうりはあさう













をせらせん鷹のあははさし年の神を  
 わりてらふをくらみくさしとらふ一とえ  
 破よ銅をいししてかみ神りくとい神り  
 入よをそくはくろりの目の前をれてあこ  
 〇鷹をいしとらふ朝中へ東をりしあ  
 ぶ夕よの西をりしとらふ一

〇兄弟のお大鷹と向他かくる事ありか

一ら中まにまられて大あふ一とらふら  
 一とらふいめえうすうらふ一

三十あつは侍もなり

〇この文に正統<sup>せいとう</sup>の巻はといふに城<sup>しろ</sup>記<sup>き</sup>文あり十  
 二巻より仲れせん巻なりたあちをいせん人  
 一とらふくくといふ実<sup>まこと</sup>みなりといふ事なり  
 をこのまらむは侍とく次他人とてまを



好よりハて傳

○小一多院傳この事也終り

御書制二人

忠意

信親

御大綱目人

景任  
平松

景松  
将山

嘉暦三年二月廿三日書寫畢

在鷹府後者自後祿藏寺殿西郷殿春之集

及御相傳自書寫畢

右一帖石波家之秘傳之流絶く内流  
布之抄也文字誤之西律書之多之北用檢  
志不可用之也中寫多也

寶永六巳年

十二月吉日



